

〔Ⅲ〕

ムスリム同胞団の成立と戦間期エジプト社会

「ムスリム社会運動」研究のために

I.

ここで与えられたテーマは、ムスリム同胞団を両大戦間期のエジプトに発生・展開した社会運動の一形態、すなわち「ムスリム社会運動」と把握した場合、どのような研究課題を設定することが出来るか、というものである。しかし、本稿ではムスリム社会運動に関する構造分析そのものに取り組むというよりは、むしろ近代エジプトの社会史・社会運動史に関する研究状況の一端を紹介するという予備的作業に目的を限定している。

まず、「社会運動」概念についてははじめに若干の説明を加えておこう。本稿で用いる社会運動は、どちらかと言えば社会学で用いる「集合行動 (collective behavior)」に近い、幅の広い概念であり、たとえば原初的反抗 (primitive rebels) などと表現される様々な過渡的運動形態を含むものである。すなわち、高度に組織化され、明確で体系的なイデオロギーを持つ近代的社会運動にとどまらず、組織性と継続性において劣り、利害の追及とイデオロギーの結合が不安定・不明確であるような多くの民衆運動の伝統的諸形態（具体的には都市暴動や農民反乱など）を含むものである。そして近代エジプトの歴史が示すように、現実の社会運動の展開は、いつも前者から後者への単線的な「自然史 (natural history)」的發展過程を描くばかりではなく、両者の同時進行の局面、あるいは（とくに現代エジプトにおいては）前者の抑圧のために後者の原初的形態が表出するという局面を含むものであ

たことに注意したい。また特に後者の場合、運動の主体が如何に伝統的価値を動員し、それに従って伝統的行動様式をとったとしても、これと本来的な伝統的反抗、あるいは「前期的」反抗とは区別しなければならない。なぜなら、この原初的反抗の場合は、運動主体の自己認識がたとえ伝統回帰的・復古的なものであったとしても、運動が「近代」というコンテクストに置かれていることそれ自体が、それ以前の「前期的」運動と区別する積極的意味を持つからである。多くの国の近代史の事例が示すように、これらの復古的運動は、結果として主観的意図とは全くかけ離れた歴史的役割を果たすことがしばしばあった。本稿では、以上に見たように、近代における社会運動の二重の範囲、すなわち両大戦間期に本格的に展開する固有な意味での近代的な社会運動と、それ以外の様々な伝統的・過渡的形態とを区別し、またその相関に注目して議論を進めてゆくことにする。

さて、社会運動概念についても一つ付言したいのは、ここではそれを近現代エジプトに関する地域研究のための文字通り原初的な概念、すなわち特殊な歴史過程における歴史主体の索出概念として使用しようとしている点である。したがって、たとえば社会運動研究についてよく知られた二つの理論体系、すなわち正統派マルクス主義の階級闘争論とアメリカ社会学の集合行動論のいずれかを、近代エジプトの歴史的現実 directly 適用しようとするものではない。

このように社会運動を近現代エジプトの地域研究のための問題索出概念として設定した場合に、我々がまず参考としなければならないのが、板垣雄三氏による一連のエジプト社会運動史研究である。¹⁾ まず板垣氏の研究において、この社会運動概念は、社会学的な抽象的・単数形的概念ではなく、何よりも具体的・個別的な複数形の諸社会運動 (social movements)、あるいは諸運動の複合体として登場する。そして氏は、民族運動の展開をエジプト近代史の時期区分の基準とし、その段階の画期＝民族革命期を、いわば諸運動の「輪切り」的状況として、客観的に分析しようとしている。そのエジプト

近代史の画期とは、言うまでもなくオラービー運動（1879－82年）、1919年革命、1952年革命の三つであった。

まず、オラービー運動について、板垣氏はこれを近代的な社会運動が形成途上にあるひとつの形態、いわば近代的運動のプロトタイプとしてとらえようとする。たとえば、運動の主導的役割を担った国民党とは、「アフガーニー的組織原理」を持った「諸（秘密）グループのルースな多面的結合体」であり、「三つの主導的要素」（農民出身将校、立憲主義者、イスラーム革命派）の「混沌たる結合」であった。とくに、運動の展開にあたって「シャイフ連絡組織」が重要な役割を果たすなど、「伝統的な政治社会と接合しつつ人民の新しい政治勢力を創り出す」「アフガーニー的組織作り」は、後のワフド運動、そしてムスリム同胞団の運動へ連なる先駆的形態を示すものであった。また氏は、1870年代後半における農村の新勢力の登場についても言及しているが、この新しい歴史状況を背景としたオラービー運動への農民の参加と、19世紀前半に発生した原初的な千年王国的農民反乱との段階的格差は、今後の重要な研究課題である。すなわち、このような農民の参加によって、はじめて民族主義革命をめざす運動が大衆的組織基盤をもって展開しえたのであり、この民族革命が様々な運動の複合体として、いわば諸運動の器として機能した状況は後の二つの革命においても同様であった。その点でもオラービー運動は、近代的な社会運動の原型として位置付けられるのである。さて次に、1919年革命に関する研究において、板垣氏は、その歴史的な位置付けの重要な一側面として、この革命が本格的な社会運動の出発点を形成するものであったことを強調する。氏は、マルクス主義理論の硬直的な適用による「1919年革命＝民族ブルジョワ革命」論を退けて次のように述べる。

「三月蜂起の同時的爆発の条件を、安易に民族ブルジョワジーの全国的『指導』にのみ収斂させるのではなく、大衆運動の質そのものに還元して吟味し直さなければならない。」そして「全般的に蜂起の中で、それがまさに大衆的決起であればある程、階級的矛盾が強まらざるをえなかった」と分析し、

社会運動の民衆レベルへの深化に伴い、社会問題の包括的解決を目指す社会革命に展開する可能性のあったことを示唆している。また、この大衆蜂起には、農民反乱や労働運動の過激化に加えて、婦人や子供の役割、とくに婦人運動に目覚しいものがあったことに注目する。れそゆえ「三月蜂起は著しく豊かな展開の可能性をはらみ、あらたな社会運動の出発点を一挙にもたらしただ」と評価できるのである。

板垣氏が明らかにしたことを敷衍すれば、確かに1919年革命以降の両大戦間期は、労働運動の民族化＝エジプト人化を初めとして、婦人運動、あるいは法律家協会のような専門職・知識人の諸団体、学生運動、社会主義・共産主義運動、さらには議会政治に挑戦する青年エジプト党のようなファシスト的性格をもつ大衆行動組織などが、誕生・発展した時期であった。そのほか、この時期の諸運動の中には、後に52年革命の主導的勢力となる秘密結社的な軍人の社会運動も含まれるだろうし、そしてムスリム同胞団が代表するところの近代的社会運動としてのムスリム社会運動、あるいはコプト社会運動の存在を見出すこともできるであろう。

II.

それではなぜ、両大戦間期というこの時期に、本格的な近代的社会運動の急速な生成・発展が見られたのであろうか。付言すれば、それ以前の原初的で未成熟な運動の段階、あるいは運動が強力な民族主義的国家体制に吸収・統合されていったそれ以降の時期と比較した場合、この時期に運動の成立条件を用意した社会史的な段階的特殊性とは何であろうか。このような社会運動の段階規定を議論するにあたり、運動の発生史的背景の分析のために、ここでは少なくとも次のような二つの問題点を手掛りとして指摘できるところ。それは、(1) 社会運動が最終的に変革・改革の対象として対峙してゆく

社会体制、とりわけ国家の性格と、この社会体制と社会運動との関係、および(2) 社会運動を近代エジプトの社会史的空間、とくに都市－農村関係というコンテキストに置いて考えた場合、どのような段階的特徴が見出せるか、ということである。

まず後者の「運動の社会史的空間」という問題からみていこう。その場合、まずエジプト社会史研究の先駆者、ガブリエル・ベアー (Gabriel Baer) の諸研究、とりわけ都市化（および都市－農村関係の変化）の研究と都市暴動・農民反乱の考察を、まず最初に取り上げる必要がある。²⁾ これらの研究によれば、広義の意味での社会運動、とくに農民や都市大衆によって担われたその原初的な形態の運動が、18世紀末以来、都市と農村という二つの舞台を替えて、交互に立ち現われてきたことがわかる。

18世紀末期から19世紀初頭のムハンマド・アリ体制の形成に至る時期は、とくに反フランス侵略軍蜂起（1798年）を頂点とする都市暴動が続発した時期であった。ベアーは、従来のウラマーによる反乱主導説に対して、都市無産層の参加と民衆的リーダーの登場を強調する。これに対して次の19世紀は、集権的な国家体制（民族国家の原初的形態という意味の限りでの「絶対主義」国家）の登場に伴う増税・徴用と、棉花経済の展開に伴う農民層分解を背景にして、一貫した農民反乱が続いた時期であった。その中にはマフディーを名乗る千年王国的運動（たとえば1865年アブー・ティグの反乱）も見られたが、しかし最大でしかも明確な政治的要求を掲げた行動は、前述のオラービー運動への農民の参加であった。この19世紀に見られる一貫した農民反乱は、ベアーが分析したように、都市化を伴わない従属的農業開発の上に繰り広げられたものであった。この従属的開発に対する最大の反抗であったオラービー運動が、イギリスの武力介入によって鎮圧されたことは、同時にこの従属的「農業資本主義」発展のための強固な政治的上部構造、すなわち植民地的国家体制が形成されたことを意味していた。この植民地的国家体制のもとで、剰余収奪メカニズムである大地主制度の形成と、近

代的農業・水利システムへの移行が完成する。

この強圧的体制の下で、当初農民の不満は、農村犯罪の増加や外国人への暴力という屈折した形態で表われざるをえなかったが、やがて再び民族運動と結びつくことにより広汎な規模で爆発する。この1919年革命と農民反乱の関係について分析を行なったシュルツェ (Reinhard Schulze) によれば、この1919年革命はおよそ一世紀前にありとあらゆる形の原初的反抗の再生であったとともに、農民反乱の終焉を飾るものであったという。すなわちこの農民反乱の失敗は、農民大衆をして中央の政治過程から疎外し、「首都が今や農民の社会的逃避の場所となり、この新しいスラムで20世紀の首都反乱が用意される」画期となった。そしてこの農民の都市流入は、限定的な水資源の上に展開した棉花モノカルチャー経済の袋小路的状况、すなわち近代的農業水利開発がもはや農村の人口問題を解決できない状態に陥ったことを示していた。こうして両大戦間期は、エジプトの「農業資本主義」システムの変換を模索する最初の時期となった。後に1952年革命によって否定されるこの民間資本主導型の民族主義的工業化については、その「従属性」および大地主制との関連をめぐって現在も評価が分かれている。しかし、この工業化過程の中で形成されたエジプトの初期産業社会において、分化した利益集団が生成し、そしてこれを近代的社会運動にまで育て上げてゆく特殊な社会層が登場してくることになる。

さて次に、社会体制に関する第二の問題に移るならば、前述の植民地的国家体制と、今日の体制、すなわち70年代に変容を受けながらも基本的性格は受け継がれている52年革命体制（ここではナセル体制と呼ぼう）との間では、社会運動に対する対応が大きく異なることがわかる。この両体制の性格の差異こそが、両大戦間期（正確には52年革命以前期）と今日における社会運動の形態の差異を決定づけるのである。すなわち、植民地的国家体制とは自由な社会運動の展開に対する様々な形態の抑圧の上に成り立つ体制であった。これに対してナセル体制は、社会運動の吸収、上からの運動の統合（た

だし「選択的」統合)の上に成立した体制である。たとえば、ナセル体制への対応といった点で、いずれも体制形成に大きな影響を与えた二つの社会運動、すなわちムスリム同胞団と共産主義運動は、明確な相異を見せた。周知のように、ムスリム同胞団がナセル体制との正面对決を選び徹底的な弾圧を受けたのに対し、共産党は同じく苛酷な弾圧を被りながらも自ら体制に統合化(1965年自主解党宣言)されていったのである。

さて一方で、両大戦間における植民地的国家体制の場合も、一貫して全面的な社会運動抑圧の態度を取り続けていたわけではない。そして同体制において、部分的ではあるが運動の体制への統合に重要な役割を果たした「社会層」として、エフェンディー層の存在を指摘する必要がある。エフェンディー層の定義は、それ自体独立した難しい問題であるが、ここでは植民地的国家機構のもとで拡充された官僚・近代的知識層の総称としておこう。彼らは、伝統的な土着社会の出身で近代的知識と固有の生活様式を身につけた社会層であり、植民地支配と土着社会との仲介役を勤めた。すなわち、彼らは植民地的国家体制によって育てられ、これに依存する側面と同時に、この国家支配へのパイプとして伝統社会のネットワークの一部、突端部を形成するという側面を合わせ持っていた。(こうした中央の政治過程と地域社会をつなぐ社会層としてのエフェンディー層の役割は、今日の体制のもとでも変わっていない。)彼らは、出身農村あるいは同族の利害の代弁者であるのと同様に、たとえば当時、職人層などを基盤に展開した初期労働運動に対して、19世紀末に解体したギルド組織のシャイフの役割を代替する国家との仲介的機能を果たした。これらの初期労働運動が、エフェンディーの指導する民族運動に動員されていった背景には、伝統的社会関係を代置した特殊なパトロン・クライアント関係の存在が指摘されている。

そして、シュルツェによれば、1919年革命とは、このエフェンディー層による国家権力奪取の要求=民族主義と、伝統的自治の復活を求める農民反乱の「同床異夢」的結合であった。しかし農民反乱は、エフェンディー層の植

民地権力への妥協によって最終的に裏切られ、やがてエフェンディー層は、形式的独立の下で与えられた形式的議会制度の枠組に参加することによって、より積極的に植民地的国家体制を支持してゆくことになる。そして植民地権力と土着の支配諸階層の間で繰り広げられた権力ゲーム、「対立的協調」の下で維持されたこの新体制は、やがて急速に成長した社会諸運動により挑戦を受けてゆく。その場合、この再編された植民地的国家体制の社会問題に対する克服能力が問われたのである。

さて、この社会体制と社会運動の間の対立関係の軸となる、当時深まりつつあった社会問題とは、大地主制がもたらす矛盾に表現された農業問題と、やがてパレスチナ戦争を契機に一挙に激化する民族問題の、相互に基底部で深く結びついた二つの問題であった。この両者の結びつきは、やがて問題の深刻化に伴い、諸運動がますます民衆に根をおろすようになればなるほど、ますますより正確に認識される可能性が増大したのである。その中で、ナセルらの自由将校団運動が、クーデタ後、社会改革にある程度成功を収めたのは、その意味で極めて俊敏な情況認識を行なう能力に優れていたからであろう。もちろん、すべての社会運動が、その出発点において最初からこれら社会全体の構造改革を目指す目的意識をもっていたわけではない。また、社会包括的なイデオロギーを運動の連帯基盤としていたタイプの社会運動、たとえば共産主義運動でさえ、これらの基本的課題は先験的というより実践を通して認識を高めてゆく運動の軌跡をたどった。おそらく、ムスリム同胞団の社会認識と実践の相関も、同様の過程を描いたのであろう。一方それ以外の社会運動、すなわちそれぞれの特殊な集团的利益を迫及し、またその集団利益の自覚をそもそも創りあげる所属アイデンティティーの共同獲得を連帯の基盤としている多くの社会運動においても、事態は同様であった。その場合、社会問題総体の深刻化に伴い、個々の利益の迫及から出発しながらも、その自らの問題解決をより広い社会単位の構造変革と結びつける形で運動を展開し、その運動過程の中で社会問題を発見してゆくという運動の成長過程を描

くことが、許されるかもしれない。そして、この共通の社会問題の発見という社会認識の展開こそ、異なった運動の間における連帯の基盤を用意するものであった。

両大戦間期の諸社会運動の研究に際しては、このような個々の社会運動にとっての発生—成長過程を分析し、それぞれの発展段階における時期区分を明らかにすることがまず必要である。また次に、これらの個々の運動の相互関係を分析し、相互の社会的連帯の基盤となる要素を明らかにすること、そしてそれらの相関の中で社会問題を真の意味で解決する能力をもつ歴史主体の形成を把握することが重要である。

以上の社会運動研究と同様に、ムスリム社会運動の分析においても、発生期の原初的な諸形態から、社会体制の構造変革に対する体系的な綱領をもった近代的社会運動に発展する過程を描くことが可能なはずである。その場合、社会体制への対応において、または農業問題や民族問題といった具体的な問題への取り組みにおいて、たとえば共産主義運動との比較は、有益であろう。また、社会運動の相互関連について言うなら、同胞団と労働運動あるいは農民大衆との関係は、いずれも重要な研究課題である。また、女性問題、婦人運動との関わりも同様である。なぜならそれは、ムスリム同胞団が具体的な社会問題を解決するプログラムを提示し、したがって諸運動の社会的連帯の基盤を提供しうる統合力を持った歴史主体として、当時登場していたかどうか、について客観的材料を提供するからである。

さて、以上の非常に雑駁な議論を要約し、また、近代エジプトの社会運動研究における方法論上の主要テーマをもう一度整理すれば、次の通りである。

- (1) 運動の舞台背景となる社会史的空間の問題——とくに従属的農業開発の展開と変容に伴う都市—農村関係の変化。
- (2) 社会運動が対峙すべき社会体制の性格規定。

(3) 諸運動の社会的連帯の基盤となる社会問題展開の認識。

また、ここで筆者が考える両大戦間期の社会運動研究の主要な研究課題を
列挙すれば、次の通り。

(1) 労働運動と共産主義運動は、決定的な段階で、なぜ有機的結合に失敗
したか。

(2) なぜ小生産者的結合を連帯の基盤とする組織的な農民運動が全面展開
しなかったか——共産党・同胞団による農村工作はどこまで進展したか。

(3) ムスリム社会運動（あるいはコプト社会運動）の社会的基盤は何か。

(4) ワフド運動の担い手、エフェンディー層の概念規定の問題。

Ⅲ.

最後に、今後の分析の材料を提供する意味で、ムスリム同胞団と労働運
動の関わりを一部分析した最近の研究を若干紹介することでむすびに替え
たい。それは、Ellis Goldberg, Tinker, Tailor and Textile Worker —
Class and Politics in Egypt, Berkeley, California U. P., 1986 であ
る。

ゴールドバーグは、四つの労働運動の事例を中心に、発生期にあるエジプ
ト労働者階級と政治運動（ワフド、同胞団、とくに共産党）との関係を分析
している。その四つの事例とは、それぞれを扱った章の名を付して並べれば
以下の通りである。

(1) ”名前ばかり”：職人と小商人。

(2) ”労働者の服を着た農民たち”：精糖労働者。

(3) ”労働貴族”：煙草・精油労働者。

(4) ”プロレタリアの織物”：繊維労働者。

これらのうち、すでに触れたところのエフェンディー層のワフド的政治指導を受け入れた(1)の職人層の初期労働運動を除いて、他の三例は、いずれもムスリム同胞団の何らかの影響力が見られた。そのうち(3)の煙草・精油労働運動と(4)の繊維労働運動においては、活動家の何人かが同朋団メンバーであり、また運動の主要な指導者はハサン・アル＝バンナーの非常に親しい友人か弟子であったが、しかし運動全体を同胞団が掌握するには至らなかった。前者は、労働運動の政治化には慎重であり、52年革命後はむしろナセル政権による労働運動の上からの統合過程(いわゆる corporatization)に積極的に対応してゆくことになる。また後者の運動は、もっとも政治意識が高く洗練された組織を持ち、そして共産主義運動と深く結びついていたが、最終的にはマルクス主義の革命理論を運動展開の「青写真」とすることは拒否してゆく。

以上の例に対して、(2)の精糖労働運動は、アル＝バンナーの弟を初めとする同胞団メンバーによる運動の掌握が成功する。そしてこの同胞団による運動掌握は、ちょうど中央の政治過程の動きを反映する平行的現象として展開した。すなわち、30年代までこの精糖労働運動を指導したワフドが対英交渉に関心を移し、労働者に幻滅を与えた後、40年代にムスリム同胞団がワフドの地位を襲ったのである。

さて、ゴールドバーグは、同胞団による精糖労働運動の掌握の原因を、この労働集団が持つ次のような幾つかの農村的＝伝統的特徴に求めている。すなわち、これらの精糖労働者の大半は、上エジプト農村出身の季節労働者であり、彼らは組合活動のリーダーであったフォアマン層の伝統的＝家父長的な人格的支配に動員される形で運動に参加していった。同胞団は労働者の生活要求の汲み上げに力量を発揮するとともに、このフォアマン層の掌握に成

功したのである。そして組合規約の分析から、ゴールドバーグは、その規約が「明白な特殊イスラーム的思考の反映であり、小生産者（しかも職人ではなく農民）の世界と結びついたものである」と解釈している。また、運動の組織それ自体は、形式的には「世俗的」なものであったが、メンバーシップの性格そのものはイスラーム的であり、事実、執行部のうち二人はシャイフ、同じく二人がハーッジの称号を持ち、40年代の労働組合の中でもっともイスラーム的性格の強い組合であったとする。そして、同胞団の成功の背景として、これらの精糖工場の多くが外国人資本家の所有であったために、労働運動が民族主義、さらにイスラーム・イデオロギーへと傾斜しやすかったことを指摘している。その他、この同胞団の指導する労働運動は、ワフド系、共産党系の運動よりもはるかに生産ラインの維持に関心を払い、その意味で経営と労働との仲介役を自認していた。さらにゴールドバーグは、同胞団の繊維労働運動への進出過程において、戦術的にはリーダーシップの弱体性の表明に他ならない無統制な暴力の爆発という脅迫的手段を用いたり、また警察への内通を利用したりするなど、運動展開の過程で未成熟な限界性を露呈したと指摘している。

さて、以上のゴールドバーグ描く「ムスリム労働運動」のイメージを整理するなら次のようになるう。

（１）成員と組織において農村的性格が強く、伝統的・人格的支配を特徴としていたこと（それはとくに伝統的呼称の使用に表現されていた）、（２）運動の連帯基盤となる目標設定が、反外国人主義と文化的共同体の維持・回復に置かれていたこと（それゆえ「搾取」ではなく「不正（zulm）」といった用語法が見られる一方、相互扶助団体という性格が強く経営との妥協も見られた）、（３）運動の戦術としては、国家権力への接近や「脅迫」的手段の使用が特徴であったこと、などである。

しかし、こうした性格規定は、単にムスリム労働運動のみならず、むしろムスリム同胞団の特徴として、かなりステレオ・タイプの類型化されるも

のとよく似ている。たとえば、学生運動とムスリム同胞団の関係を一部分分析対象としたAhmad Abdalla, The Student Movement and National Politics in Egypt, London, Al-Saqi Books, 1985 においても、同様に類型的なムスリム同胞団像が見られる。たとえば、「アル=バンナーと多くの学生との関係は、神と父親の像を結び合わせたものであった」とか、アル=バンナーは学生の個人生活にも細かい指導を行ない、下部組織には家族（ウスラ）という名を付けていた云々、という具合である。しかし、もとよりアル=バンナーのカリスマ性や、そして文化的・生活的共同体を運動の出発点、すなわち連帯の初期的基盤に据えたことは、ムスリム同胞団の近代的社会運動としての性格を否定するものではない。

いまだ多くの事実が明らかでない同胞団の運動に関して、我々は、予断を持った類型的なムスリム社会運動認識に対して、次のように幾つかの点で慎重であらねばならない。第一に、人格的・伝統的支配は、何もムスリム同胞団だけに特徴的な現象ではない。多くの運動、たとえばかつてのエジプト共産党や今日の左派組織にもそれに類似したものを指摘することができる。第二に、動員対象の農村的性格についても（今日の急進的運動の成員分析においても見られるが）、近現代エジプトの農村―都市に広がるネットワークの問題を考えれば、単純な二項対立的な類型的モデルの適用には慎重である必要がある。また第三に、運動の戦術において、国家権力への過度な接近や脅迫的手段の使用など未成熟な側面を残していたと言っても、それは当時の特殊な立憲王制という人格的支配の要素の強い抑圧的国家体制に対応した戦術だとも言え、したがって、その戦術そのものから組織の性格、あるいは変革の方向性を判断することは出来ない。

さて、以上見てきた中でムスリム社会運動把握の最大のポイントは、連帯の基盤となる自覚したムスリムとしての所属アイデンティティーの上に構築される特殊なイスラーム・イデオロギーの問題である。社会運動の性格の考察にあたっては、政治学的手法による外面的用語分析や、構成メンバーの表相

的特徴の分析に終始することなく、この運動の連帯基盤が歴史的に形成される場について、より広い分析の射程の中でとらえ直すことが必要である。たとえば繰り返しになるが、ムスリム社会運動は、その固有なイスラーム・イデオロギーという社会認識の枠組みの中で、現実の民衆の生活に直結した社会問題の解決に対してどのようなプログラムを用意することが出来たか。これを分析することは、ムスリム社会運動が他の多くの社会運動をどこまで自らの下に統合してゆく能力をもっていたかどうかを問うことになる。ムスリム同胞団を典型とするエジプトのムスリム社会運動の研究は、連帯の基盤であるイデオロギーの展開が、近代というコンテクストの中で、どのように具体的な社会問題と諸社会運動の動態に対応していったかを実証的に分析するところから始める必要がある。

[注]

- 1) 板垣氏によるエジプト社会運動の主要な研究は以下の通りである。このうち本稿では(2)と(5)の一部を取り上げるにとどめた。
 - (1) 「アラブ民族主義とイスラム——ムスリム同胞団をめぐって——」『思想』1961年11月号。
 - (2) 「オラービー運動(1879-82年)の性格について」『東洋文化研究所紀要』第31冊、1963年 3月。
 - (3) 「ムスリム同胞団の解体について」
 - (4) 「エジプトの社会運動に関する覚え書——初期労働運動および労働者の状態について」アジア経済研究所『所内資料』No. 43-13、1968年 7月。
 - (5) 「エジプト1919年革命」『岩波講座世界歴史25』1970年。
- 2) Baer, Gabriel, Studies in the Social History of Modern Egypt, Chicago, Chicago U. P., 1969 および Fellah and Townsman in the Middle East, Studies in Social History, London, Frank Cass, 1982 に所収の諸論文。また農民反乱については、アリー・バラカート教授の『近代エジプト農民叛乱史』が、アジア経済研究所から翻訳、出版の予定である。
- 3) Schulze, Reinhard, Die Rebellion der agyptischen Fallahin 1919, Berlin, Baalbek, Verlag, 1981.